

雪印種苗アメリカ株のご紹介

雪印種苗アメリカ株

本 間 誠

雪印種苗アメリカ株は、2000年12月15日にオレゴン州ポートランド市に設立されました。会社を紹介する前にオレゴン州について若干紹介したいと思います。オレゴン？あまり馴染みのない州かも知れませんが、南をカリフォルニア州、北をワシントン州に挟まれた太平洋に面した州で、面積は日本の本州と四国を合わせたくらいの大きさです。一次産業、すなわち農林業、水産業が伝統的に盛んですが、最近ではIT関連のハイテク産業も急速に発展し、日本からの進出企業も少なくありません。また、1980年の中ごろ日本の民放で放映された「オレゴンから愛」という当時好評だったドラマのロケ地となったことから覚えておいての方もいらっしゃるでしょう。

ちょっと横道にそれますが、日本・韓国両国開催で盛り上がった先のワールドカップサッカーでは、ゲームの勝敗もさることながら、世界初のドームスタジアムと天然芝を使った移動式ピッチ（芝フィールド）の札幌ドーム、アジア最大級のサッカー専用スタジアムの埼玉スタジアムなど施設面でも大きな関心呼びました。ニュースにも取り上げられ、その中で紹介された緑鮮やかなピッチは非常に印象的でした。すでにご存知の方も多いとは思いますが、これらの競技場のピッチに使用された芝用品種の種子はほとんどが米国で生産されたものです。

スポーツ施設に使われる芝の場合、特に関東以北ではライグラス、ケンタッキーブルーグラス、トールフェスクなどをブレンドして使う場合が多いようですが、中でもライグラスは九州など暖地でも冬季オーバーシーディングに使われ、1年を通して最も多く利用されている草種と思われるま

表1 年度別、輸入国別ライグラス輸入量* (kg)

	1998年	1999年	2000年
デンマーク	83,440	76,025	34,925
UK	250		
オランダ	2,000	10,053	7,380
ドイツ		22,978	9,000
カナダ			40,115
USA	3,099,718	3,530,072	3,282,470
オーストラリア	12,600	24,910	47,015
ニュージーランド	43,493	32,304	52,000
Total**	3,251,926	3,696,342	3,485,949

* 経済産業省輸入統計資料

** 上記の各国の他にも若干量の輸入実績のある国があります

す。表1は1998～2000年に日本に輸入された「ライグラス種子」の主な輸出国と数量を表しています。

「ライグラス種子」には大別して、牧草に多く使われるアニュアルライグラス（イタリアンライグラス）と、ゴルフ場やサッカー場などスポーツ施設などにも多く使われるペレニアルライグラスの2種類があるため表ではその内訳はわかりませんが、日本に輸入された「ライグラス種子」約3,500トンのうち実に95%が米国で生産されており、ケンタッキーブルーグラス、トールフェスクも同様にその多くが米国で生産され日本に輸出されています。また、米国の中でもオレゴン州が主要イネ科草種（牧草・芝生植生用併せて）の種子生産量は抜きん出ており、表2にあげた草種の中では唯一ケンタッキーブルーグラスのみ全米第2位ですが、その他の草種は全米第1位の生産量を誇っています。特にライグラス、オーチャードグラスの生産量は全米の99%、また、フェスクは64%を占めるほどですから、いかにオレゴン州に種子生産が集中しているかがお判りになると思います。

表2 オレゴン州における年度別、イネ科主要草種の種子生産量* (トン)

	1998年	1999年	2000年	2001年
ペントグラス	2,676	2,857	3,039	2,253
ケンタッキーブルーグラス	6,032	5,579	7,030	8,430
トールフェスク**	73,572	85,365	96,886	100,840
オーチャードグラス	7,438	7,030	6,486	7,001****
ライグラス***	202,709	247,705	230,242	206,466

* オレゴン州農務部統計局資料
 ** トールフェスク、チューイングフェスク、レッドフェスク含む
 *** アニュアルライグラス、ペレニアルライグラス含む
 **** オレゴン州立大学予想

牧草・芝生植生種子の主要産地としてのみならず、小麦をはじめとした農産物、また最近ではワインなどを通して日本とは大変関係の深い州です。

前置きが長くなりましたが、雪印種苗アメリカ(株)について簡単に紹介させていただきます。

雪印種苗アメリカ(株)は、前述の通り主要イネ科草種の採種地として大変重要なオレゴン州に設立された雪印種苗(株)100%出資の海外現地法人です。

その第1の目的は、親会社である雪印種苗(株)の種苗部門の基幹となっている、自社育成牧草品種の種子生産を高品質でかつ安定的に行うことにあります。従来私どもは、自社育成品種の米国での種子生産事業は米国種苗各社を通して生産農家に委託しており、年数回、日本からの出張で圃場や精選施設、保管倉庫などをまわり適宜作柄や品質のチェックを行ってききました。しかし、近年このような従来の管理体制では十分な対応が出来なくなるほど、種子生産事業を取り巻く環境は変化し

ております。

企業・事業のグローバル化が進み、海外の種苗各社は合従連衡を繰り返す、また、投機的な買収も行われ、その結果倒産の憂き目に会ったり、モンサント、シンジェンタなどに代表されるように、化学薬品関連企業などこれまでは種苗そのものを扱っていなかった企業の傘下に組み込まれたりといったことが日常的に起きています。種苗会社が倒産すれば委託種子生産の契約そのものが債権者に渡り、競売にかけられ、見も知らぬ第三者の手に渡ることもあり得ます。企業が買収されたり合併すれば、効率化のため重複する部署の統廃合を行います。そしてこれまで契約から種子生産を一括して担当していた者が配置換えになったり、解雇されたりするためこちらの意図がうまく伝わらず、種子生産圃場が連絡のないまま耕起されたり、栽培面積が計画通りに取れなかったりといった事が起きないとも限りません。残念なことに似たようなことは実際に起きています。

また、環境に対する配慮から、5～6年前からオレゴン州では圃場の焼却がほとんど出来なくなりました。通常、7月に種子を収穫した圃場はストロー(葉茎)など圃場残渣をそのまま燃やすことにより、病害虫の駆除、雑草種子や他作物扱いとされるこぼれ種子からの萌芽などが抑制され、翌年収穫される種子の品質維持に重要な役割を果たしてきました。しかし、圃場焼却禁止により、病害虫による収量低下、雑草種子の混入、こぼれ種子からの萌芽による保証種子規格落ちなどがしばしば報告されてきております。



写真1 ポートランド市



写真2 ポートランド市

草種によっては圃場焼却することにより翌春の分枝を促し、採種量が上がる効果も期待されていますが、圃場焼却の禁止はオレゴン州だけでなく隣接する州にも広がっており、ケンタッキーブルーグラスの主要産地であるワシントン州、日本のチモシー品種生産のほとんどが集中しているアイダホ州でも、将来これらの種子生産に重大な影響があるものと懸念されています。

このような環境では米国種苗各社及び生産農家と密接な関係を作るだけでなく、播種以前に農家・種子生産圃場の選定段階から関与し、播種、生育期間、収穫そして精選、出荷まで、年間を通してこれまで以上に積極的に関わってゆく必要があります。こういった産地、圃場に密着した、継続的な管理・指導体制は日本からの出張では時間的な制約のためどうしても限界がありました。

駐在員を置くことにより、播種予定圃場には何が植えられていたのか？、播種直前の圃場の清潔度は？、生育期間を通して病害虫の発生は？、雑草や他作物の混入は？、開花期の揃い性に問題は

ないか？、収穫後の精選、保管に問題はないか？、といった確認がシーズンを通してしかも自分の目で可能になり、万一問題があった場合には速やかに対応することが出来るようになります。例えば、種子生産圃場の縁辺はどうしても雑草などの侵入が多くなりがちですが、常に圃場を巡回し、雑草の混入を確認次第、掃除刈りを行わせることで雑草種子による汚染を回避することが出来ます。また、その品種のオーナーであり、種子を購入する私達が直接生産農家と緊密に連絡を取り合うことで、仲介している米国種苗会社が仮に買収にあたり倒産したとしても、農家は安心して高品質種子生産に専念できることになります。

第2の目的として、牧草に限らず自社で育成された種子の海外市場への販売が挙げられます。ワシントン州では乾草用チモシーに自社育成品種であるホクセイ、ホクエイが使われ始めており、量は少ないながら野菜種子の米国内販売も順調に伸びてきております。また、牧草種子の一般種、普通種と呼ばれる種子についても、品質を身近に確



写真3 ワシントン州アルファルファ採種圃場



写真5 アイダホ州チモシー採種圃場



写真4 ワシントン州立大エダマメ試験



写真6 オレゴン州ライグラスストロー収穫



写真7 オレゴン州ニンジン採種圃場



写真9 オレゴン州ライグラス刈り倒し



写真8 オレゴン州フェスクハーベスト

認した上で安定的に買い付けを行うための作況調査や、乾草、ストローといった粗飼料原料の生産状況等種子のみならず、関連する商品、商材の情報収集も重要な目的であり、さらには、より安定的かつ安価な種子生産の場としてのカナダや南米などでの種子生産事業の可能性調査のほか、こういった地域からの新規作物の紹介、導入なども大切な業務と位置づけられております。

以上、簡単に雪印種苗アメリカ株の業務を紹介致しました。

今年はカナダ、米国で記録的な猛暑及び早魃のため、小麦、トウモロコシや大豆など農作物に少なからぬ影響を受けました。幸いオレゴン州の天候は乾燥気味に推移したものの、作物に影響を与えるほどではありませんでした。しかしながら、小麦の供給逼迫、相場の急回復をにらんで農家はこれまでの牧草・芝生植生草種の圃場を耕起し、替わって冬小麦を播種し始めており、これから 11



写真10 イタリアンライグラス・タチウセ刈り倒し

月にかけて新規に作付けされる秋播き圃場においても牧草・芝生植生種子と小麦の圃場の取り合いが起きることが予想されます。雪印種苗アメリカ株は、第1目的である自社育成牧草品種の高品質、安定生産に主眼を置き、より良い圃場の確保に努め、日本の多くのお客様に安心して使っていただける種子の生産に全力を挙げる所存です。

会社設立は2000年12月ですが、実際に農家・種子生産圃場選定の業務が始まったのは昨年8月で、ようやく1年が経ったに過ぎません。まだまだ、手がつけられずにいる業務が山積しておりますが、優良種子の生産だけでなく、有用情報の提供などサービスも充実させていきたいと考えておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

米国ご訪問の際には是非当社にもお立ち寄りいただき、種子生産圃場の現場をご紹介する機会を与您にいただけましたら幸いです。